

中古文学会二〇二一年度春季大会

研究発表・大会企画シンポジウム資料集

〈日程〉 二〇二一年五月二三日（日）
〈形態〉 オンライン開催

中古文学会 2021 年度春季大会

大会プログラム *すべてのイベントをリアルタイム中継型（Zoom 使用）で実施します。

5 月 22 日（土）

15:00-16:00	2021 年度 第 1 回委員会
-------------	------------------

5 月 23 日（日）

09:30-09:40	開会の辞 中古文学会代表委員 久保 朝孝
09:40-10:20	研究発表会 『源氏物語』における人物の美的表現「きよら」「きよげ」再考 同志社女子大学〔院〕 岸 ひとみ ……休憩（10分）……
10:30-11:10	『源氏物語』の欠如と余剰—国冬本源氏物語句宮巻と『雲隠六帖』の関係を中心に— 大東文化大学〔非〕 越野 優子 ……休憩（10分）……
11:20-12:00	『源氏物語』浮舟の「手習」の諸相 学習院大学〔院〕 増田 高士 ……休憩（60分）……
13:00-13:10	大会企画 シンポジウム「リベラル・アーツとしての古典研究の可能性」 趣意説明・ディスカッサント 神奈川大学〔教〕 深澤 徹
13:10-13:35	基調報告 1 「“発見の物語”を越えて」 明星大学〔教〕 前田 雅之
13:35-14:00	基調報告 2 「古典の翻案の可能性—実践者の立場から」 川村学園女子大学〔教〕 千野 裕子
14:00-14:25	基調報告 3 「これからの日本古典籍研究のビジョンをめぐって」 早稲田大学〔教〕 河野貴美子 ……休憩（30分）……
14:55-16:00	討議・質疑応答 〈司会〉桐朋女子高等学校音楽科〔教〕 西野入篤男 ……休憩（20分）……
16:20-16:50	2021 年度 定例総会
16:50-17:00	閉会の辞 中古文学会代表委員 久保 朝孝

*〔教〕専任教員、〔非〕非常勤教員、〔院〕大学院学生

研究発表要旨

『源氏物語』における人物の美的表現「きよら」「きよげ」再考

同志社女子大学〔院〕 岸 ひとみ

『源氏物語』における「きよら」「きよげ」という語句は、従来から、会話文・心内文・地の文・草子地を区別せずに、主としてそれらの語に隣接する語句や、どの人物に対して使用されているかに着目して論じられ、両語を血統や身分で区別して、「きよら」を一級の美として「光源氏型」、「きよげ」を二級の美として「頭中将型」とであると捉えるのが定説となっている。

しかし、会話文では、話し手が聞き手を意識して意図的に使用されることが多い。語り手が「きよら」「きよげ」と記す場合は、物語の中で客観的なものであるが、登場人物がそのように感じた場合には、その人の思いが入り、主観的なものとなる。

そこで、本発表では、人物に対する「きよら」「きよげ」という美的語彙を、会話文以外において、語り手を含む、そのように表す人物の視点を基準に論じることを試みる。語り手が「きよら」「きよげ」をどのように描き分け、作中人物の主観がいかなるものであるか。「きよら」の人に対して「きよげ」、「きよげ」の人に対して「きよら」と形容されている、例外的使用の美的語句がどういう意味を持つのか。

「きよら」には、絶対的「きよら」と相対的「きよら」が存在し、「きよら」という語は、単なる美的語彙にとどまらず、語り手視点の「きよら」には、物語を展開に影響を与える力があり、作中人物視点では、その人の心を動かしていく機能を持つことを明らかにしたい。

『源氏物語』の欠如と余剰—国冬本源氏物語句宮巻と『雲隠六帖』の関係を中心に—

大東文化大学〔非〕 越野 優子

作者自筆本の無い『源氏物語』において、現在読んでいるものはあくまでも『源氏物語』と認定されているものに過ぎない。さてこの物語の従来の研究のあり方を振り返ると、本文研究の視点の範囲は『源氏物語』それ自体の枠内に留まり、続編・外伝等は中世物語研究の枠内で行われてきたのが大方の傾向であった。但し加藤昌嘉が「作中人物の連関があれば、すべて『源氏物語』と認めてよい」(注1)と述べた如く、如何なる組み合わせもその連結する証拠があれば可能となると考える。

この度発表者は作品内外の枠を取り払い、『源氏物語』の別本・国冬本と続編的な作品『雲隠六帖』(室町期成立・作者未詳)について、前者(国冬本)の欠如と後者(『雲隠六帖』)の余剰を本格的に考察したい(注2)。「幻」巻巻末「ついたちのほとの事つねよりことなるへくときてさせ給みこたち大臣の御ひきいて物しな／＼のろくともなとになうおほしまうけてとそ」(国冬本)に続き「句宮」巻冒頭で始まらない国冬本『源氏物語』と、題名だけでなく「かくてむ月の御ころおきてなど」(『雲隠』巻)以降の世界をもつ『雲隠六帖』が織りなす世界について論じ、『源氏物語』のもつ豊かな可能性を問いたいと考えている。

注1 加藤昌嘉(2011)「散逸「巢守」巻をめぐる」『揺れ動く源氏物語』勉誠出版,244p

注2 越野優子(2020)「『源氏物語』と異本」(『ユリイカ』No.767,vol.52-15)で概要を一部述べた。

『源氏物語』浮舟の「手習」の諸相

学習院大学〔院〕 増田 高士

『源氏物語』には手習する女性たちが登場するが、その中でとくに印象的なのは紫の上と浮舟であろう。紫の上は「若菜上」巻において、「古言」を書き綴る形で手習する場面がある。浮舟については古注釈以来の「手習の君」という呼称がその重要性を物語っている。

先行論においても、両者の手習が取り上げられることが多く、紫の上の手習の延長上に浮舟の手習を位置付ける論がある。たしかに両者は自身の抱えるもの思いを手習するという点が共通するものの、両者の手習の様相を同質のものとして架橋することが適切であろうか。「若菜上」巻の紫の上の手習は、自身が抑圧した不安や苦悩を手習の方が却って正直に教えてくれたというものであったが、浮舟と手習との関係は紫の上のそれとは異質ではないだろうか。

本発表ではこのような問題提起をした上で浮舟の手習を主に扱うが、手習した人物と書かれたものとの関係に注目しながら考察する。具体的には、「浮舟」巻、「蜻蛉」巻、「手習」巻の三巻でそれぞれ異なる浮舟の手習の様相を検討する。浮舟は「浮舟」巻で自身の「身」を「憂し」と意識することが多く、そのような意識との関連を手がかりにして手習を分析する。それをふまえて「蜻蛉」巻、「手習」巻の手習にはどのような特徴があるのかについても検討する。紫の上との相違点を指摘することとまらず、浮舟の手習の固有性を明らかにしたい。

大会企画 シンポジウム 「リベラル・アーツとしての古典研究の可能性」

趣意説明・ディスカッサント	神奈川大学〔教〕	深澤 徹
基調報告 1	明星大学〔教〕	前田 雅之
基調報告 2	川村学園女子大学〔教〕	千野 裕子
基調報告 3	早稲田大学〔教〕	河野貴美子
討議	〈司会〉桐朋女子高等学校音楽科〔教〕	西野入篤男

〔趣意〕

本シンポジウムは、中古文学研究の立場からする、「古典」とは何かについての根源的な問いかけを意図している。「古典」は「古典」として既にあるのではない。それを「古典」として維持し、継承していく人びとの、たゆみない努力なくして「古典」は「古典」たりえない。この自明の事柄を、いわゆる「リベラル・アーツ」の営みとの関連で明らかにしていきたい。

「一国二制度」に基づく高度な自治を否定されてしまった「香港」や、独裁的な権力者による言論弾圧のいまだ続く「ベラルーシ」の事例に見てとれる昨今の国際情勢にかんがみ、自由平等の「市民社会」を今後とも維持していくためには、いわゆる「リベラル・アーツ」がどうあっても欠かせない。「表現の自由」と「基本的人権」を根幹にすえる民主主義社会を今後とも死守し、次世代へと継承していく上で、その重要性は、ますます高まる。

にもかかわらず、「リベラル・アーツ」の必要性に対する意識は、ここ日本では極めて低調である。1991年の「大学設置基準」の大綱化以降、教養教育課程（一般教育課程）の軽視と、その削減の動きが、各大学で進行した。日本の高等教育機関（大学）において、従来「リベラル・アーツ」の役割を担ってきたのは「教養学部」や「文学部」、「文理学部」や「人文学部」などであった。だが、そうした「リベラル・アーツ」を主体的に担う学部は、時代のニーズにこたええないとして次々と改組される傾向にあり、国公立大学に至っては、教員養成系や人文・社会系の学部の廃止までが取りざたされている。カントのいう「諸学部の争い」さながら、教養教育課程の諸機能は、いままさに解体の危機にさらされている。そうした趨勢にあらがって、「リベラル・アーツ」の重要性について、さらなる注意喚起を行う上で、本シンポジウムは大いに資するところあるものと自認する。

まず確認しておきたいのは、近代以前の古文（古典語）で書かれた、過去の古いテキストだから「古典」なのではない。時代を問わず、地域を問わず、古今東西にわたり普遍的な価値を有するものが「古典」なのである。ただし、自由と民主主義、さらにはリベラル・アーツそれ自体をも含めて、なにをもって普遍的価値とするかは立場によって異なる。かくして〈正統〉と〈異端〉、〈真理〉と〈虚偽〉、〈正義〉と〈不正義〉、〈美〉と〈醜〉などをめぐってのイデオロギー闘争のアリーナとも「古典」はなりうる。そうした「古典」をめぐるヘゲモニー争いの熾烈なバトルに積極的に参画し、キリスト教文化圏の西欧や、儒教文化圏の中国に依存するのではない、日本発の「古典」を、どのように立ち上げていったらいいのか。

については広く世界の趨勢を視野にいれ、その動向を多分に意識しての、活発な議論の展開されんことを、本シンポジウムにおいて大いに期待したい。

[文責：深澤徹]

研究発表
資料

『源氏物語』における人物の美的表現「きよら」「きよげ」再考

同志社女子大学(院) 岸ひとみ

一、はじめに

【資料1】 先行研究

● 辞典

【きよら】 きよ(清)ーら…その状態であることを表す。

【きよげ】 きよ(清)ーげ(気)…「らしく見える」

【もの】…「何となく」

【けうら】…「きよら」に同じく、その転か。(『角川古語大辞典』)

● 「きよら」「きよげ」

【隣接する語に注目】

①中西良一氏「源氏物語に於ける「清ら」「清げ」

『学芸研究 人文科学』二(和歌山大学学芸部)一九五二年二月

②宮田恵子氏「源氏物語に於ける「清し・清ら・清げ」

『学習院大学国語国文学会誌』第一号一九五八年三月

【主体人物に注目】

③大野晋氏「④の物語」『源氏物語』(『古典を読む』(岩波書店)一九八四年五月)

④谷口典子氏『「きよし」の系譜―王朝美表現の一考察―』(校楓社)一九七六年二月

⑤福井佳代子氏「源氏物語における人物評価に関わる美的語彙の研究―「きよら」「きよげ」を中心に―」『国文橋』第三十八号(京都橋大学)二〇一二年三月

【従来説への疑問】

⑥藤田加代氏「「きよげ」「きよら」再考 その2. 源氏物語における用例を中心に

して」『高知女子大学保育短期大学部紀要』第十七号一九九三年

● 例外的な「きよら」「きよげ」

先行研究③ 「清ら」と「清げ」とは必ずしも社会的な位置に固定した形容語ではなく、相手を遇する使い手の意識によって使い分けられる

先行研究⑤ 「きよら」「きよげ」は、視点と場面において相対的に評価

⑦深田弥生氏「『源氏物語』における例外的「きよら/きよげ」の一考察―「視点」に着目して―」『古代中世文学論叢』第39集(新典社)二〇一九年十一月

二、視点人物別の「きよら」「きよげ」用例数(公語文を除く)

	きよら (「評判」を除く)			きよげ		
	語り手	作中人物	計	語り手	作中人物	計
視点 主体						
光源氏	1	14	15	2		2
冷泉帝	1	4	5			—
朱雀帝	1	6	7			—
夕霧	3	4	8	2	1	4
匂宮		7	9	1		1
頭中将	1		1	1	4	5
薫	+	1	2		4	5
(否定)						
明石の中宮 の皇子達			—	1		1
紫の上		7	7			—
女三の宮		2	2			—
玉鬘	1	1	2	1	2	4

三、語り手の視点での「きよら」

【資料2】 光源氏の「きよら」

世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。(桐壺①一八頁)

【資料3】 冷泉帝の「きよら」

十一になりたまへど、ほどより大きにおとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ。(濔標②二八一頁)

【資料4】 朱雀帝の「きよら」

院もいときよらにねびまさらせたまひて、御さま、用意、なまめきたる方にすませたまへり。(少女③七一頁)

【資料5】 夕霧の「きよら」

①直衣なじさま変れる色聴されて参りたまふ。きびはにきよらなるものから、まだきにおよすげて、され歩きたまふ。帝よりはじめてたてまつりて、思したるさまな

へてならず、世にめぐらしき御おぼえなり。(少女③六二頁)

② いづれとなくをかしき容貌どもなれど、なほ人にすぐれて、あざやかにきよらなるものから、なつかしうよしづき恥づかしげなり。(藤裏葉③四三六頁)

③ 女は、またかかる容貌のたぐひもなどかなからんと見えたまへり。男は、際もなぐきよらにおはす。(藤裏葉③四五七頁)

四、作中人物の視点による「きよら」

【資料6】 光源氏の「きよら」

桐①いとどこの世のものならずきよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり。

明くる年の春坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど。(桐壺①三七頁)

女②人々のぞきて見たてまつる。入り方の月いと明きに、いとどなまめかしうきよらにて、ものを思いたるさま、虎狼だに泣きぬへし。(須磨②一六九頁)

供③海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ御さまのゆゆしうきよらなること、所からはましてこの世のものと見えたまはず。(須磨②二〇〇頁)

老④まだほの暗けれど、雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふを、老人ども笑みさかえて見たてまつる。(末摘花①二九二頁)

頭⑤ことさらに田舎びもてなしたまへるしもいみじう、見るに笑まれてきよらなり。(須磨②二二三頁)

紫⑥桜の御直衣にえならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ装束きたまひて罷申ししたまふさま、限なき夕日にいとどしきよらに見えたまふを、女君たならず見たてまつり送りましたまふ。(薄雲②四三八頁)

柏⑦戯れたまふ御さまの、にほひやかにきよらなるを見たてまつるにも、かかる人に並ひて、いかばかりのことに心を移す人はものしたまはむ。(若菜上④一四四頁)

左⑧御年の加はるけにや、ものものしき気さへ添ひたまひて、ありしよりけにきよらに見えたまふ。(葵②七七頁)

玉⑨いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおほゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを。(若菜上④五六頁)

世⑩いとあはれに、世人も見たてまつる。藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり。(賢木②九八頁)

女⑪内にも人々のぞきて見たてまつる。うちかしこまりて、かたみにうるはしだちた

まへるも、いとどきよらなり。(梅枝③四一八頁)

桐⑫いとどきよらなる御髪をそぐほど心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと思し出づるに、たへがたきを心づよく念じかへさせたまふ。(桐壺①四五頁)

【資料7】 冷泉帝の「きよら」

藤①御髪はゆらゆらとどきよらにて、まみのなつかしげににほひたまへるさま、おとなびたまふまに、ただかの御顔を抜きすべたまへり。(賢木②一一五頁)

藤②御齒のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへるかをりうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり。いとかうしもおぼえたまへること心憂けれど、玉の瑕に思さるるも。(賢木②一一六頁)

玉③月の明きに、御容貌はいふよしなくきよらにて、ただかの大臣の御けはひに違ふところなくおはします。(真木柱③二八五頁)

玉④濃くなりはずまじきにや」と仰せらるるさま、いと若くきよらに恥づかしきを、違ひたまへるところやあると思ひ慰めて聞こえたまふ。(真木柱③三八五頁)

【資料8】 朱雀帝の「きよら」

桐①御容貌もいとどきよらにねびまさらせたまへるを、うれしく頼もしく見たてまつらせたまふ。(賢木②九六頁)

藤②御さま容貌もいとどなまめかしうきよらなれど、思ひ出づることのみ多かる心の中ぞかたじけなき。(須磨②一九七頁)

藤③御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月にそふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、(審標②二八一頁)

秋④いにしへ思し出づるに、いとどなまめきよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし。(絵合②三七二頁)

光⑤一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいとどきよらになまめいて、わが作れる句を誦したまひしも、思ひ出できこえたまふ。(須磨②二二二頁)

光⑥うるはしき御法服ならず、墨染の御姿あらまほしうきよらなるも、うらやましく見たてまつりたまふ。(柏木④二〇四頁)

【資料9】 夕霧の「きよら」

女①薄き鈍色の御衣、なつかしきほどにやつれて、(中略) 見たてまつるに、宰相中将、同じ色のいまずこしこまやかなる直衣姿にて、纏巻きたまへる姿しも、またいとどなまめかしうきよらにておはしたり。(藤袴③三二九頁)

女②弃の君 宰相などのおはしたると思しつるを、いと恥づかしげにきよらなるもて
なして入りたまへり。(柏木④三二八頁)

女③かの君は、(中略)これば、いとすくよかに重々しく、男々しきけはひして、顔
のみぞいと若うきよらなること、人にすぐれたまへる。(柏木④三三三頁)

朱④容貌も盛りりにほひて、いみじくきよらなるを、御目にとどめてうちまもらせた
まひつつ、このもてわづらはせたまふ姫宮の御後見にこれをや(若菜上④二四頁)

五、同一人物(中将の君・浮舟)視点別の「きよら」「きよげ」

【資料10】①匂宮の「きよら」、②薫の「きよげ」

中①ゆかしくて物のはさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、
(東屋⑥四二頁)

中②歩み入りたまふさまを見れば、げに、あなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、
なまめかしうきよげなるや。すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひ
きつくるはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへる。

【資料11】薫の「きよげ」、匂宮の「きよら」

浮 女は、また、大将殿を、いときよげに、またかかると見しかど、こま
やかにほひ、きよらなることはこよなくおはしけりと見る。(浮舟⑥二二二頁)

六、例外的な「きよら」「きよげ」

【資料12】光源氏の「きよげ」

玉①活けみ殺しめおはする御さま、尽きせず若くきよげに見えたまふ。
(蜩③二〇三頁)

夕②親ともおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。
(野分③二六六頁)

【資料13】先行研究

先行研究⑤ 用例①…くつろぎの状態で、視点人物が身内、用例②…父親としての理
想像から離れた若々しい光源氏の姿が、夕霧の視点で「きよげ」

先行研究⑦ 用例①…主鬘の視点で光源氏への悪感情による「きよげ」への格下げ
用例②…夕霧は紫の上の美しさに驚き、光源氏が「きよげ」と二段低く見えた

⑧古川幸奈氏『源氏物語』における言葉の様相―「きよら」な夕霧の「きよげ」な姿

―『皇學館論叢』第五十一巻第三号(皇學館大學人文學會 二〇一八年六月
光源氏が「男」として描かれている時に、「きよげ」となる

【資料14】夕霧の「きよげ」

語①大将も督の君も、みな下りたまひて、えならぬ花の蔭にさまよひたまふ夕映えい
ときよげなり。(若菜上④一三八頁)

語②指貫の裾つ方すこしふくみて、けしきばかり引き上げたまへり。軽々しうも見え
ず、ものきよげなるうちとけ姿に、(若菜上④一三九頁)

光③すき事をしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪ゆるしつべ
く、あざやかに清げに若う盛りりにほひを散らしたまへり、(夕霧④四七一頁)

落④男の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限
りもなう清げなり。(夕霧④四八〇頁)

【資料15】先行研究

先行研究② 母葵上は、その人柄、性格、容姿等を見るに孰れも兄頭中将に通う面が
多く、寧ろ「清げ」の人と言ふべきで、その「清げ」の流れが夕霧の上に発現

先行研究③ 用例④…女二の宮(落葉の宮)は皇女、夕霧は臣下

先行研究⑤ 用例①②…蹴鞠のように、服装が乱れる行事、用例④…くつろぎ姿
先行研究⑦ 用例③…他者との比較による格下げ、用例④…否定的感情による格下げ

先行研究⑧ 光源氏を父に持ち、頭中将系列に属する葵上を母に持つ夕霧が、「き
よら」と「きよげ」を併せ持つ。「光源氏/夕霧II(若い十)きよげ」は、親
子そつて好きごとに興じる二人の、盛りある「若い」「男」としての姿を連想

【資料16】匂宮の「きよげ」

語 つとめて、雪のいと高う積もりたるに、文奉りたまはむとて御前に参りたまへる。
御容貌、このごろいみじく盛りりにきよげなり。(浮舟⑥一四八頁)

《参考》明石の中宮の皇子達の「きよげ」

語 后腹のは、いづれともなく気高ききよげにおはします中にも、この兵部卿宮は、
げにいとすくよに見えたまふ。(匂宮部⑥三三三頁)

【資料17】先行研究

先行研究③ 匂宮は皇子だが、帝と対している場合には「清げ」
先行研究⑤ 帝のような対象人物より格上の者の前、心が乱れている様子は、「きよげ」

先行研究⑦ 「浮舟の視点を利用しつつ、匂宮巻における「きよらなる御名」への異

議申し立てと響き合わせ、登場人物の視点を相対化するための「きよげ」

⑨拙稿「『源氏物語』匂宮の「きよら」再考―匂宮部卿巻冒頭を起点として―」

『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第二十一号 二〇二二年三月

明石の中宮の皇子達を「きよげ」とする用例と呼応していることから、匂宮を「ま
はゆき際」ではないとした語り手以外に、源氏を知る人物である帝の視点の内

【資料18】 頭中将の「きよら」「きよら」

【語】 いときよらにものものしくふとりて、この大臣ぞ、今さかりの宿徳とは見えたま

へる。主の院は、なほいと若き源氏の君に見えたまふ。(若菜上④一〇〇頁)

【語】 同じき大臣と聞こゆる中にも、いときよげにもものしく、(常夏卷③二四六頁)

【資料19】 先行研究

先行研究⑤ 「頭中将の「きよら」は頭中将自身の資質ではなく、光源氏の恋物語の

主人公の素質を強調する役目」

【資料20】 玉鬘の「きよら」

【語】 ①「の君ねびとこのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さ

へ加はればにや、品高うつくしげなり。(玉鬘③九二頁)

【乳】 ②いとうつくしう、ただ今から気高くきよらなる御さまを、ことなるしつらひなき

舟にのせて漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。(玉鬘③八九頁)

【資料21】 先行研究

先行研究② 用例①：母夕顔に比してその美の優越、用例②：四才の幼時を形容した

乳母の詞。いずれも玉鬘の本質的な美の正しい評価とするに不十分

先行研究⑤ 該当場面で格別に尊い身分であるのは、玉鬘。玉鬘が六条院でヒロイン

になるための資格を与えるため

⑩安野葵氏『源氏物語』の形容表現からみる玉鬘の人物造型―「きよら」に関して―

『古典教育デザイン』第二号(横浜国立大学) 二〇一七年三月

視点や場所を考慮して、高貴の身分でない人物を女主人公として物語に位置づける

【資料22】 薫の「きよら」

【光】 ①なほいとよく思ひ出でらるれど、かれはいとかやうに際離れたるきよらはなかり

しものを、(略)わが御鏡の影にも似げならず(横笛④三四九頁)

【夕】 ②「藍の直衣のかぎりを着て、いみじう白う光りうつくしきこと、皇子たちよりも

こまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり。(横笛④三六四頁)

【語】 ③顔容貌も、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもな

きが、(匂宮部卿⑤二六頁) 否定形

【資料23】 先行研究

先行研究② 作者は敢て薫に源氏系の「清ら」を与えまいとしたのか。出生にまつわ
る宿命的な暗さを負った薫は、その美に於ても柏木の影を逃れる事が出来なかつた

先行研究③ 薫は幼くて、まだ光源氏の周りを駆け廻っていたときには「清ら」

先行研究⑤ 薫の「きよら」は、「主役性」を表す

⑪三枝秀彰氏「薫試論―その主題的に内実とするもの―」

『中古文学』第三十五号(和泉書院) 一九八五年五月

第二部と第三部の間で薫の造型はくい違ふ。薫における主題の変更がそれを要請

⑫長野まり子氏「ひかりかくれたまひに―後編の世界―」

『大谷女子大國文』第十二号 一九八二年三月

薫に対する「きよら」の否定は、柏木の息子として「光る源氏との距離」が示され

たもの。物語の方向を示す

⑬拙稿「『源氏物語』薫の「きよら」考」

『同志社女子大学日本語日本文学』第三十一号 二〇一九年六月

源氏は、自分にそっくりであれば「きよら」と思う。源氏が薫に対して用いた「き

よら」という語句は、薫が実の子に思われるという源氏の意識を喚起

《参考》①②光源氏の「きよら」、③夕霧の「きよら」(光源氏の視点)

【光】 ①わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、(未摘花①三〇六頁)

【光】 ②面瘦せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば、(須磨②一七三頁)

【光】 ③ただうちまもりたまへるに、いとめでたくきよらに、(夕霧④四七一頁)

* 『源氏物語』の本文引用は、『新編日本古典文学全集』に拠り、傍線等は発表者にて付した。

* 「きよら」「きよげ」の用例の上に付した標記は、次のとおり視点人物の略称を表す。

語	語り手	光	光源氏	桐	桐壺帝	宋	朱雀帝	夕	夕霧	頭	頭中将
柏	柏木	左	左大臣	藤	藤壺	紫	紫の上	玉	玉鬘	臈	臈月夜
落	落葉の宮	秋	秋好中宮	浮	浮舟	中	中将の君	乳	乳母	女	女房
老	老人	供	供人	世	世人						

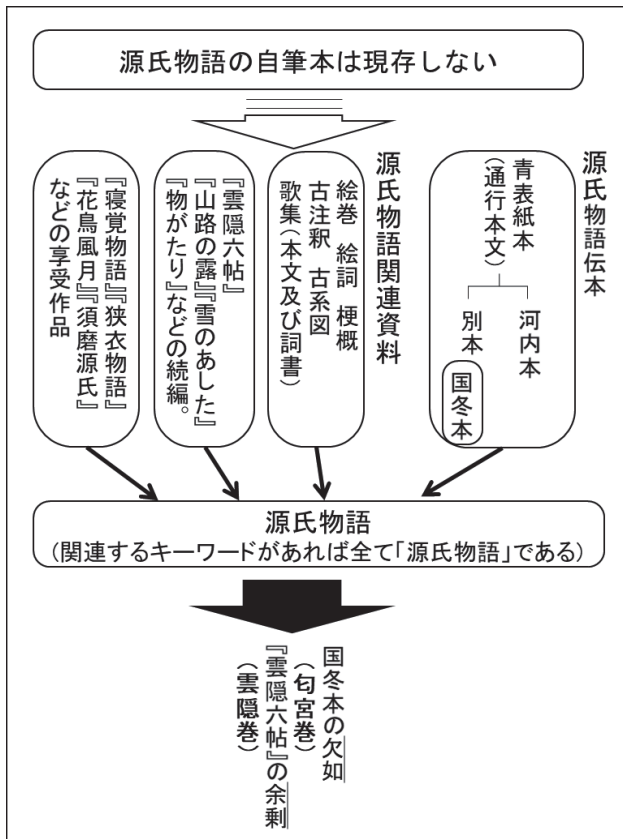
『源氏物語』の欠如と余剰

—国冬本源氏物語句宮巻と『雲隠六帖』の関係を中心に—

大東文化大学(非) 越野優子

一. はじめに—問題の所在

【資料1】現在の本文研究と享受研究の簡略構図



【資料2】加藤昌嘉の見解 (参考文献① 244p)

・ z 作中人物の連繋があれば、すべて、『源氏物語』と認めてよい

【資料3】国冬本源氏物語句宮巻欠如の問題

・ 拙稿(2020)「欠如で幕開ける物語—国冬本源氏物語句宮巻について」『物語研究』20号、62-78p

・ 拙稿(2020) 国冬本源氏物語夕霧巻の分断と読解—落葉の宮の人物像を中心に—『詞林』(67)、60-75p,

【資料4】「雲隠」巻存疑 (古注釈／神野藤昭夫 (参考文献②))

・ 『紫明抄』「第廿六くもかくれ雲隠 もとよりなし」
 ・ 『河海抄』「巻名 匂兵部卿宮巻にひかりかくれ給にしといへり其心敷」
 ・ 神野藤昭夫(1988)「かくして雲隠巻存疑の問題は、ほんのわずかの可能性を残してほぼ決定的である」

二. 『源氏物語』国冬本の概要と問題

【資料5】国冬本の概要

伝津守国冬等各筆源氏物語(天理大学附属天理図書館蔵) 54冊のこと。12冊が鎌倉末期写の同筆本であり残りが11人の伝承筆者による室町末期写。20帖が別本。青表紙本系統の巻(若菜上)・河内本系統(若菜下・椎本・総角)の巻がある。最古の源氏物語本文たる源氏物語絵巻絵詞と類似する本文をもつ。二度大幅な改装の際に散逸や錯簡が起きたと考えられる。54巻のうち句宮巻は、内容は夕霧巻の一部なので実質的には現存しない。(参考文献③岡嶋偉久子など)

【資料6】国冬本幻巻巻末

・ 物思ふとすくる月日はしらぬまに としもわか世もけふやつきぬる

ついたちのほと的事つねよりことなるへくとをきてさせ給みこたち大臣の御ひきて物しな／＼のろくなどにもなうおほしまうけてとそ(26才)
・通行本文 同様 「おほしめせは人にしたかひなつかしきさまにの給はせて今はとていかかならせたまひけんいとかなしうこそ」(麦生・阿里莫)
「おほしまうけてなとその給める心えぬ事ともいみしう数しらす待るめれと本のまゝなればかく人の人の心をくれたるとそなり侍りぬへきこれもまた本のまゝなり」(東大)

【資料7】国冬本匂宮巻の冒頭(内容は夕霧巻後半部)

(大和守の落葉宮への説得の言葉の途中)「みたまへ」ゆつるへき人もはへらすいとたい／＼しういかさまににくみたまふるを」(1丁オ1行〜2行)
通行本文夕霧巻当該箇所「いかにと見たまふるを」その他「いかにと」河内「いかに／＼と」(麦・阿)

【資料8】通行本文その他の匂宮巻の冒頭(光の消失が大前提の世界)

光かくれたまひにしのち、かの御かげに立ちつぎ給ふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。(通行本文)

「立ちならひ」(麦・阿)「ありかたかりけり」(河内)「かの」無し(麦)

三 『雲隠六帖』の概要と『源氏物語』との関係

【資料9】岡一男・小川順子・咲本英恵など(参考文献④)

室町期成立の作者未詳の作品。内容は『源氏物語』の続編的な内容で雲隠・巢守・桜人・法の師・ひばり子・八橋の六巻からなる。巢守巻以降は宇治十帖の内容に繋がる。梗概的な内容で偽書に分類されることもあり、また「天台六十巻説」を補足するような仏法くささも指摘されてきた。本文成立は別本系統↓流布本系統とされる。写本・版本あり。本発表で掲出した本文は小川順子氏の校訂による別本系統の堀田文庫本(↓参考文献④参照)。

【資料10】『雲隠六帖』雲隠巻冒頭／堀田文庫本(参考文献④)

かくて正月の御心をきてなとれいよりもいとこまかにのたまひをきてければ・(中略)・ついたちとらの一といふに(1才)↓傍線欄が幻巻傍線部に連結(資料【6】)

「正月」―「睦月」(京都大学蔵など江戸期の版本)

【資料11】御法巻の時間間隔と構造(不完全な四季／幻巻の承前)国冬本

・むらさきのうへいたうわつらひ給ひし御心ちのゝちいとあつしくなり給てそこはかとなくなやみわたり賜ふ事ひさしくなりぬ。(通行本文・その他「賜ふ」給ふ)

・やよひの十日なれば花さかりにて・・・

・夏になりてはれいのあつさにさへいとゝきえいり給ぬへきおり／＼おほかり。「なりて」―「なれば」(東)

・秋まちつけて世中すこしすゝしくなりては御心ちもいさゝかさはやくやうなれとなをともすればか事かまし。「すこし」無し(保坂・東)

・(八月)一四日うせ給ひてこれは一五日のあかつきなりけり。

「一四日に」(通行本文)「あかつきなり」(保)

【資料12】幻巻の時間間隔と構造(正月から師走の二二カ月構造／完全な

四季の描写 国冬本)

・春のひかりを見給に付ても・・・(二月)

・きさらきになれば花の木ともさかりになるも・・・(二月)

・春ふかくなり行まゝにおまへのありさま、いにしへに変わらぬを・・・

(三月)「かはらぬ花のさかりを」(保・麦・阿・中山)

・夏の御かたより御衣かへの御さうそくたてまつり給とて(四月)

「さうさく」(麦・阿・中)

・五月雨はいとゝなかくめくらし給よりほかのことなくさう／＼しきに(五

月)「つれ／＼なるに」(麦・阿)

いとあつきころすかしきかたにてなかめ給に、(六月)

「すかしき」(国) — 「すゝしき」(通行本文・陽明文庫本) ナシ(麦阿・中・東・御物本)

・七月七日もれいにかはりたることおほくあそひなともし給はて、(七月)「七月」— ナシ(保・東)「あそひ」— 「御あそひなとも」(通行本文・御・河内・言経)

・御法事(紫の上／八月一日)のいとなみにて、(八月)

「御心事」(河)「御なをし」(陽)

・九月になりて九日わたおほひたるきくを御覽して、(九月)

「九月」— 「九月になりてわたおほひたる」— ナシ(御・保・中・東)

・神無月は大かたもしくれかちなるころ、(十月)

「神無月になりて」(保)「神無月には」(言)「神無月にも」(阿)「神無月は」(通行本文)

・五せちなといひて世中そこはかとなくいまめかしけ成ころ、(十一月)

「世中そこはかとなく」ナシ(麦・阿)「ころ」ナシ(御)

・御仏名もことしはかりにこそはとおほせはにやつねよりもことにさくちやうのこゑ／＼などあはれにおほさる(十二月)「御ふみみはてゝ多なども(東)「おほせは」(御)「ことによふかき」(御・中)

・↓【資料6】幻巻巻末の晦日の描写

【資料13】『雲隠六帖』雲隠巻の時間の構造(密から粗へ／『源氏物語』を

巻き込みながら)／堀田文庫本

「光源氏の動静／元旦」

・↓【資料10】『雲隠六帖』雲隠巻冒頭(元旦)／御法巻から直結

・いまたあけさるに(朱雀院の御所に)おはしつきたり(元旦)。(ウ)

・むつきの一日なれとも(元旦)。(ウ)

「光源氏の動静／出家・日付不明」

・つゐにそのほゐもとけすしてかくむなしきさまになり給へる(ウ) ※参考「故院のうせ給てのち三年はかりのすゑに世をそむき給しさかの院にも六条院にも」(『源氏物語国冬本複製宿木巻』(ウ)行)

「冷泉院の動静／光源氏出家前後・日付不明」

・は宮のふくのうちにかの御こと(御法巻の夜居の僧の話)はきしそかし(ウ)「御こと」— 「御かた」(九曜文庫蔵)

【資料14】雲隠巻の源氏と朱雀院の時間(三年間)

・かくて山には御ふたりうちかたらひ給ひて、(ウ)

・三とせはかりありてあるしの院(朱雀院)いと心ほそきさまになやみわたり給ふ(ウ)

・かくて二日はかりおはしていとたうとき御ありさまにてそはてさせ給ひける(朱雀院薨去)。(ウ)

・いと只御ひとり(源氏)になりたまへはまきるゝ事もなふそおこなひつとめ給ひける(ウ)

【資料15】雲隠巻の時間軸の転換(紫の上を中心とした時間へ)

「光源氏の動静／剃髪・日付不明」

・そのあくる年そたいのうへの七年になり給へは御くしおろし給ひける(紫の上の七回忌・五七歳)。(ウ)

「光源氏の動静／即身成仏・日付不明」

・かくてそ又十三年にあたる時さかのおくわうじやうかたにといふに入ぢやう(入定)したまはんとてむらさきのうへの御はかにおはして(紫の上の十三回忌・六三歳)。(ウ) (ウ)

・わくらはにとふ人あらは吹く風の目にも見えぬあつとこたへよこれをつゐの御ことはとそ申しける(ウ)

【資料16】『雲隠六帖』紫の上を中心とした世界への移行（参考文献④）

・三田村雅子(2004)「そうした展開の中で唯一なまなましさを以て語られるのは紫上の夢の面影である。(中略)こうした夢の頻出によって、雲隠六帖は並々ならぬ紫上追慕を語る物語となっているのである」

・咲本英恵(2010)「紫の上は生前、桜の咲く二条院で、匂の宮に桜(と紅梅)を「仏にもたてまつり給へ」と遺言した。その「桜」の表出は、雲隠六帖にいたって紫の上じしんへ捧げる(華)に変わっている。(中略)「桜」は『源氏物語』と雲隠六帖におけるそれぞれの「紫の上」をたしかに結びつけ、さらに、法華経、釈迦入滅をも繋げる役目を果たしながら、紫の上の往生を象徴しているのである。

【資料17】『雲隠六帖』雲隠巻末の相違―流布本系(近世版本)との比較

・別本系諸本―辞世歌以降二十行本文あり↓【資料15】参照
・流布本系諸本―「吹く風のあとともたまらぬあまつそらにしばしは雲のたゝすまひして(辞世歌)となん侍へりしとぞ」(『雲隠六帖抄』本文)
・↓辞世歌で閉じる形に変容したか(【資料6】幻巻巻末参照)

【資料18】『雲隠六帖』巢守巻冒頭―国冬本と同様の「光」の喪失の文言

・其比はたゞゆく多なき御事を恋なけき給ふのみにてそあかしくらさせ給ひけるとり分れいぜんらん(冷泉院の御事ははるゝ世なくいかておはしません所へ行わさもかなと・・・(二ウ))
「れいせい院」(内閣文庫蔵)・「おはしませんがん」(愛知県立大・立花和雄蔵・九曜

文庫・内閣文庫・天理図書館)

・↓【資料7・8】参照 通行本文等の『源氏物語』にある「光」の喪失の言葉が無い点で国冬本も同様(匂宮巻本文欠如故)。

【資料19】拙稿(参考文献⑤) 残れない本文群

・『雲隠六帖』や国冬本などは、小林秀雄の言の如く「本物の方にはいつて

しまえなかった「異(偽)」のままの存在なのか？

※小林秀雄(1951)「好き者の智慧からすると、ホン物ニセ物とは、模倣の出来不出来の対比の、ある極端な場合を指すに過ぎない」(『真贋』)
四 おわりに―残るものと残らぬものと―

・通行する『源氏物語』―御法・幻・匂宮・竹河・紅梅・・・
・あり得たかもしれない『源氏物語』―御法・幻・雲隠(『雲隠六帖』)・竹河・紅梅・・・(国冬本など)

※『源氏物語』の通行本文は『新潮日本古典集成』所載の青表紙本系統を掲出した。本文校異は表記レベル以上の差異がある場合のみ掲出した。国冬本は天理大学附属天理図書館の複製や『源氏物語別本集成』から本文を掲出した。『源氏物語別本集成』の諸本表示は()で示し二回以降は略称にした。傍線等発表者による。『雲隠六帖』は小川氏校訂による別本系統の堀田文庫本を使用した。【資料17】で引用した流布本系本文も同様に小川氏の参考文献④の書より使用した

【参考文献】

- ・①加藤昌嘉(2011)「散逸「巢守」巻をめぐって」『揺れ動く源氏物語』勉誠出版 244p
- ・②神野藤昭夫(1982)「雲隠巻と『雲隠六帖』」『講座 源氏物語の世界』7巻
- ・③国冬本の基礎文献は岡鳥偉久子(1993)「源氏物語国冬本―その書誌的総論」(『ピリア』100)。その他伊藤鉄也・工藤重矩・岩下光雄・中村義雄など。
- ・④岡一男(1958)「宇治十帖」以後(『言語と文芸』1号)・小川順子(2009)『源氏物語』の享受史の研究―付『山路の露』『雲隠六帖』校本』笠間書院・咲本英恵(2010)「紫の上をめぐる雲隠六帖の問題」(『共立レビュー』38・三田村雅子(2004)「偽書」の中の源氏物語(『日本古典偽書叢刊』月報
- ・⑤拙稿(2020)『源氏物語』と異本(『ユリイカ』No.767) *偽書の世界

『源氏物語』 浮舟の「手習」の諸相

学習院大学「院」 増田高士

一 先行研究と問題の所在

【資料1】吉野瑞恵「浮舟と手習 ―存在とことば―」『王朝文学の生成』『源氏物語』の発想・日記文学』の形態』第一編―四章 笠間書院 二〇一一年（初出は一九八七年七月）

「浮舟に自己の無意識にあるものを見つめさせるためにこそ、手習歌が必要とされたのだった」

「浮舟の手習は、この紫の上の手習と共通する性格を持つ」

【資料2】藤田加代「源氏物語の「手習」―浮舟の「手習歌」を中心に―」『日本文学研究』四八 高知日本文学研究会 二〇一一年六月

「紫の上の手習は、「自分でも気付こうとしなかった心の奥の想いをおのずから紡ぎ出す」『発表者注 後藤祥子論文』という点において、浮舟のそれと最も近い関係にある」

※後藤祥子「手習いの歌」『講座源氏物語の世界 九』有斐閣 一九八四年

【資料3】紫の上の手習①

硯を引き寄せたまひて、

目に近くうつればかはる世の中を行く末遠く頼みけるかな

古言など書きませたまふを、取りて見たまひて、はかなき言なれど、げにと
いとわりこひ、

命こそ絶ゆとも絶えぬ定めなき世の常ならぬなかの契りを
とみにもえわたりたまはぬを…〔後略〕…
（若菜上巻⑤五六頁）

【資料4】紫の上の手習②

対には、かく出で立ちなどしたまふものから、われより上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ、など思ひ続けられて、うちながめたまふ。手習などするにも、おのづから古言も、もの思はしき筋にのみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけりと、身ながらぞおぼし知らるる。…〔中略〕…うちとけたりつる御手習を、硯の下にさし入れたまへれど、見つけたまひて、引き返し見たまふ。手などの、いとわざとも上手と見えで、らうらうじくうつくしげに書きたまへり。

身に近く秋や来ぬらむ見るままに青葉の山もうつろひにけり

とある所に、目とどめたまひて、

水鳥の青葉は色もかはらぬを萩のしたこそけしきことなれ

など書き添へつつすさびたまふ。ことに触れて、心苦しき御けしきの、下にはおのづから漏りつつ見ゆるを、ことなく消ちたまへるも、ありがたくあはれにおぼさる。
（若菜上巻⑤七八―八〇頁）

【資料5】紫の上の手習に関する先行研究

神田龍身「晩年の紫の上」『平安朝物語文学とは何か』『竹取』『源氏』『狭衣』とエクリチュール』第二部 第十章 ミネルヴァ書房 二〇一〇年（礎稿とした論文の初出は二〇一五年）

【資料6】その他、本発表に関わる主な先行研究

小西美来「浮舟の手習歌 ―その異質性と機能について―」『百舌鳥国文』二八 大阪府立大学 学日本言語文化学会 二〇一七年三月

山田利博「源氏物語における手習歌 ―その方法的深化について―」『源氏物語の構造研究』

第三部―第二章―第一節 新典社 二〇〇四年 (初出は一九八六年六月)

山田利博「手習巻・浮舟の手習歌」『源氏物語の構造研究』第三部―第三章―第一節 新典社

二〇〇四年 (初出は一九八八年十二月)

二 「浮舟」巻・「蜻蛉」巻の手習

【資料7】句宮と浮舟の歌の贈答

「峰の雪みぎはの氷踏みわけて君にぞまどふ道はまどはず

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯石し出でて、手習ひたまふ。

降りみだれみぎはに氷る雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

と書き消ちたり。この中空をとがめたまふ。げに憎くも書きてけるかなと

はづかしくてひき破りつ。

(浮舟巻⑧五六―五七頁)

【資料8】『蜻蛉日記』下巻 手紙を見せる時、都合の悪い箇所を破る例

かたはなべきところは破り取りてさし出でたれば…〔後略〕…

(新編日本古典文学大系『蜻蛉日記他』下巻三四七頁)

【資料9】句宮と薫からの贈歌

〔句宮〕ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるるころのわびしき

(浮舟巻⑧五九頁)

〔薫〕 水まざるをちの里人いかならむ晴れぬながめにかきくらすころ

(浮舟巻⑧六二頁)

【資料10】浮舟、句宮と薫からの贈歌に対して手習する

御手もこまかにをかしげならねど、書きささまゆゆしく見ゆ。宮はいと多かるを、ちひさく結びなしたまへる、さまさまをかし。「まづかれを、人見ぬほどに」と聞こゆ。「今日はえ聞こゆまじ」と、はぢらひて、手習に、

里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き

(浮舟巻⑧六二頁)

【資料11】死を決意した浮舟の心情

とてもかくても、一方一方につけて、いとうたてあることは出で来なむ、わが身ひとつの亡くなりなむのみこそめやすからめ…〔後略〕…

(浮舟巻⑧八五―八六頁)

【資料12】浮舟、死を決意した直後に手習類を処分する

むつかしき反古など破りて、おどろおどろしく一度にもしたためず、燈台の火に焼き、水に投げ入れさせなど、やうやう失ふ。心知らぬ御達は、ものへわたりたまふべければ、つれづれなる月日を経て、はかなくし集めたまへる手習などを、破りたまふなめり、と思ふ。侍従などぞ、見つくる時は、「などかくはせさせたまふ。…〔中略〕…さばかりめでたき御紙使ひ、かたじけなき御言の葉を尽くさせたまへるを、かくのみ破らせたまふ、情なきこと」と言ふ。「何か、むつかしく、長かるまじき身にこそあめれ。落ちとどまりて、人の御ためもいとほしからむ。さかしらにこれを取りおきけるよ、など、漏り聞きたまはむこそはづかしけれ」などのたまふ。

(浮舟巻⑧八六―八七頁)

【資料13】源氏、処分を口実にして手紙を紫の上に見せる

ありつる御返り持て参れり。え引き隠したまはで御覽す。ことに憎かるべきふしも見えねば、「これ破り隠したまへ。むつかしや。かかるものの散らむも、今はつきなきほどになりけり」とて、御脇息に寄りゐたまひて…〔後略〕…
(松風卷①一四三頁)

【資料14】侍従、硯の下にある浮舟の手習を見つける

侍従などこそ、日ごろの御けしき思ひ出で、「身を失ひてばや」など泣き入りたまひしをりのありさま、書きおきたまへる文をも見るに、「亡き影に」と書きすさびたまへるものの、硯の下にありけるを見つけて、川の方を見やりつつ、響きののしる水の音を聞くにも、うとましく悲しと思ひつつ…〔後略〕…
(蜻蛉卷①一〇九頁)

【資料15】「亡き影に」歌が書かれた場面

憂きさまに言ひなす人もあらむこそ、思ひやりはづかしけれど、心浅く、けしからず人笑へならむを、聞かれたてまつらむよりは、など思ひ続けて、なげきわび身をは捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ
(浮舟卷⑧九三―九四頁)

三 「手習」巻の手習

【資料16】妹尼に見られる手習

はかなくて世にふる川の憂き瀬にはたづねもゆがじ二本の杉
と手習にまじりたるを、尼君見つけて、「二本は、またもあひきこえむと思ひたまふ人あるべし」と、たはふれごとを言ひあてたるに、胸つぶれて、面

赤めたまへるも、いと愛敬つきうつくしげなり。

ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る
(手習巻⑧二二五頁)

【資料17】『古今和歌集』巻第十九 雑躰 旋頭歌 一〇〇九

題知らず
よみ人しらず

初瀬川布留川の辺に二本ある杉年をへてまたもあひ見む二本ある杉

(高田祐彦 訳注 『新編 古今和歌集』〈角川ソフィア文庫〉 四五二頁)

【資料18】源氏が未摘花の文の端に手習するのを見る大輔の命婦

あさましとおぼすに、この文をひろげながら、端に手習ひすさびたまふを、側目に見れば、

「なつかしき色ともなしに何にこのすまむ花を袖に触れけむ

色濃き花と見しかども」など、書きけがしたまふ。花のとがめを、なほある

やうあらむと思ひ合はするをりをりの月影などを、いとほしきものから、を

かしう思ひなりぬ。

(未摘花巻①二七七頁)

【資料19】明石の上の手習

手習ひどもの乱れうちとけたるも、筋かはり、ゆゑある書きさまなり。…〔中略〕…小松の御返りを、めづらしと見けるままに、あはれなる古言ども書きませせし。

「めづらしや花のねぐらに木づたひて谷の古巢をとへる鶯

声待ち出でたる」などもあり。「咲ける岡辺に家しあれば」など、ひき返しな

ぐさめたる筋など書きませせつつあるを、取りて見たまひつつほろみたまへ

る、はづかしげなり。

(初音巻④二七一―二八頁)

【資料20】 出家後の手習と、中将へ渡してしまつ手習

思ふことを人に言ひ続けむ言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいてなつかしくことわるべき人さへなければ、ただ硯に向ひて、思ひあまるをりは、手習をのみ、たけきことにて書きつけたまふ。

「なきものに身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらけに捨てつる今はかくて限りつるぞかし」と書きても、なほみづからいとあはれと見たまふ。

限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな

同じ筋のことを、とかく書きすさびるたまへるに、中将の御文あり。…「中略」：「中将」「聞こえむかたなきは、

岸遠く漕ぎ離るらむあま舟に乗りおくれじといそがるるかな」

例ならず取りて見たまふ。もののあはれなるをりに、今はと思ふもあはれなるものから、いかがおぼさるらむ、いとほかなきものの端に、

心こそ憂き世の岸を離るれど行方も知らぬあまの浮木を

と、例の、手習にしたまへるを、包みてたてまつる。「書き写してだにこそ」とのたまへど、「なかなか書きそこなひはべりなむ」とてやりつ。

(手習巻⑧三三〇—三三二頁)

【資料21】 落葉の宮の手習が破られて夕霧に届けられる

紫のこまやかなる紙すくよかにて、少少将ぞ、例の聞こえたる。ただ同じさまに、かひなきよしを書きて、「いとほしさに、かのありつる御文に、手習ひすさびたまへるを盗みたる」とて、なかに引き破りて入れたり。

(夕霧巻⑥六五—六六頁)

【資料22】 過去を思い返す浮舟

はじめより、薄きながらものどやかにものしたまひし人は、このをりかのをりなど、思ひ出づるぞよなかりける。かくてこそありけれ、と聞きつけられたてまつらむはづかしきは、人よりまさりぬべし、さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだにいつかは見むずる、とうち思ふ。なほわろの心や、かくだに思はじ、など、心ひとつをかへさふ。

(手習巻⑧三二二—三二三頁)

【資料23】 浮舟への想いを断ち切れない中将

尼なりとも、かかるさましたらむ人はうたてもおぼえじ、など、なかなか見所まさりて心苦しがるべきを、忍びたるさまに、なほかたらひとりてむと思へば、まめやかにかたらふ。

(手習巻⑧二四〇頁)

【資料24】 新春、なぐさめの手習をする浮舟

年も返りぬ。春のしるしも見えず、氷りわたれる水の音せぬさへ心細くて、「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひ果てにたれど、なほそのをりなどのことは忘れず。

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき

など、例の、なぐさめの手習を、行ひの際にはしたまふ。

(手習巻⑧二四二—二四三頁)

(付記)

※『源氏物語』の本文は新潮日本古典集成(新潮社)により、巻名、冊数、頁数を付した。

※資料には適宜私に傍線等を付した。

大会企画シンポジウム 資料

二〇二一年度中古文学会春季大会シンポジウム
―「リベラル・アーツとしての古典研究の可能性」―

明星大学 前田雅之

「発見の物語」を越えて

はじめに―価値の専制と発明の専制―

近代発の「発見の物語」に罅は入れられないだろうか。近代（とりわけ、啓蒙Ⅱ科学主義・実証精神）が人文科学に果たした影響は絶大であり、これ抜きにして現代の研究（文献学から所謂作品論まで）は考えにくい。他方、近代とは「発見」の価値が絶大に上がったことは否めないだろう。「価値の専制」（カール・シュミット）を援用して言えば、「発見の専制」の時代こそ近代なのである。だが、古典とは発見とはどうみてもいい関係ではないのだ。ここで、「古典的公共圏」という構図を入れて、「発見」の物語を揺さぶり、超克する試みを企てたい。

（資料）カール・シュミット『価値の専制(Die Tyrannei der Zeit)』から
価値論は、対立者とされる者へのあらゆる思慮分別の脱落・完全欠如の上に構築されているので、対立者に対する闘争が至高の価値のための闘争である場合、対立者へのいかなる思慮分別も反価値となる。この反価値は、価値あるものに対して何らの権利をもたないし、そして、別けても至高の価値を貫き遠しをするにあたっては、いかなる善価(Preis)を犠牲(Preis)の用に供しても、それは何ら高いものではない。(中略)その結果、ヨーロッパ公法(jus Publicum Europaeum)となった古くからの戦争法のカテゴリー―正しい敵、正しい戦争原因、手段の比例性、そして至当な限度(das geordnete Vorgehen[debitus modus])―などは、価値を失っているものとして儆くも放逐の対象となる。(森田寛二訳、『カール・シュミット著作集Ⅱ』、二〇〇七年、原著一九六七年、邦訳題「価値による専制」)

（資料）『日本国語大辞典』（二版）
発見

（1）それまで人に知られていなかったもの、現象などをあらたに見つけること。初めて見出すこと。

*西洋事情〔1866〜70〕〈福沢諭吉〉初・二「船将閣龍（コロンビス）、亜米利加国を**発見**せしより」

*大発見〔1909〕〈森鷗外〉「顕微鏡や試験管をいぢって、何物かを**発見**しようとしてゐた事があつた」

語誌

(1)(1)の用法は明治以降に見えるもので、森鷗外は「発見」を「発見と
か発見とかいふ詞を今のやうに用ゐるのは、翻訳から出てゐるのだが(略)
今までありながら目に見えなかつたものを見るやうにする」「大発見」
としている。↓「発見」は近代の所産。

一、発見前史 近世末期における偽書と発見

一、偽書 本居宣長「松嶋の日記といふ物」(『玉勝間』二卷、『全集』)
「清少納言が年老いて後に、おくの松嶋に下りける、道の日記とて、やが
て松しまの日記と名づけたる物、一冊あり、めづらしくおぼえて、見ける
に、はやくいみしき偽書にて、むげにつたなく見どころなき物也」↓中
村幸彦「擬作論」(『著述集』十四卷)では、「偽書を擬作と呼び換えて、
肯定する立場を採れば、新しい研究の視覚が生まれてくる」とする。

速水行道『偽書叢』(一八二二〜九六 幕末〜明治時代の武士、国学者。)
小宮山綏介『草案偽書考』(一八二六〜九六、水戸藩の漢学者)

千本英史「偽書の愉しみ」(『日本古典偽書叢刊 第二卷』、二〇〇四年、
解説)「小宮山綏介の『偽書考草案』と速水行道の『偽書叢』は、とも
に近代日本が成立する過程において、偽書と「正典」とを峻別し、新しい
国民国家の「歴史」を必要とするところから生まれた作品だった。二人の
人生はそれぞれの立場で近代日本を創出することに捧げられたといつてよ
いだろう。」↓拙稿「国文学始動元年」(二〇一八) 参照。

二、発見 国学者・和学者の発見と彼らの交流圏

辛島正雄「中世王朝物語研究事始」(『中世文学』六二号、二〇一七年)
「多くの伝本は近世に書写されたものであり、とくに国学者の目にとまっ
たことを契機に写本が増加する傾向にある」↓それまでは目に止まらな
かつた。

神野藤昭夫「八重葎 解題」(『中世王朝物語全集 八重葎 別本八重
葎』、二〇一九年)「稲廼舎藏書」をめぐる

「(岸本)由豆流の師事した村田春海門としては、清水浜臣(一七七六
〜一八二四)や考証学者でこれまた蔵書家として知られる小山田与清(一
七八三〜一八四七)がいることに注目させられる。(中略)

本写本は、菟書に熱心であった父由豆流の代に蔵するところとなつたも
のかもしれないが、由豆伎であることをわざわざ示す「稲廼舎藏書」印の
あることは、由豆伎が襲蔵したことを示すものである。」↓偽書認定と中
世王朝物語などの発見はほぼ同時代だったか。

小山田与清『擁書楼日記』(『近世文芸資料』・早稲田大学図書館古典籍
総合データベース)

「文化十二年（一八一五）八月三日、晴、**平由豆流**が家にて延喜式をよむ、由豆流世称は岸本讚岐、号を**柵園**やまぶらぎのといふ、和漢の書を好て、著書あまた天下に流布（しく）、（中略）七日、晴、鳥海恭まできぬ、大窪行、菊池桐孫、**大田覃**など擁書樓の詩をつくりておこせたり、（中略）十一月八日晴、**屋代弘賢**主まできまして、朝まだきに相ともなひ、**本多甲馬君**の御許にまうでぬ。（中略）今日は**旧本今昔物語十九の巻と古今著聞集一の巻**をよみつ、君より御蔵板の活字本今物語を賜りたり」↓**古典的公共圏**の江戸末期ヴァージョン（小山田・大田・屋代は神田界限の徒歩五分内に住む）

二、近代における発見の価値

ノーベル賞等における発見・発明から考古学における「ゴッドハンドによる石器発見」（捏造だったが）に至るまで、近代における発見の価値は絶対的である。それは、近代が唯一無二のオリジナリティーを至上の価値としているからに他ならない。研究の価値も「新しさ」「オリジナリティー」が最重視される（よって捏造・剽窃は許されないが、故にまま起こる）。古典研究の場合、これに時系列が加わると、最古のモノ（伝本・資料）が最高の価値をもつ。最古の伝本（最新の発見であれ）が重視されるのも最古のモノが最も本物オリジナルと近いと見なされるからである。

よって、研究における「新しさ」・「オリジナリティー」という発見と、資料レベルにおける「最古」のモノを発見する（あるいは最古から時系列に沿ってモノを序列化する）ことという二つの発見行為ないしはシステムが近代の諸学を拘束していることになる。

しかも、それは、価値哲学（＝価値の専制）により、敵の殲滅をめざす闘争状況を出来させる（国文学界では論争がなくなって久しいが）。

三、古典はどのように読まれてきたか

古典が古典となったのは、平安末期～後嵯峨院政期（一一七〇～一二五〇年代）に確立した**古典的公共圏**によってである（拙稿「古典的公共圏の成立時期」二〇一七年）。この時期に、『古今集』・『伊勢物語』・『源氏物語』の校本・注釈が作られていった。また、古典と和歌詠作が一体化した。この事態は幕末で続いた（松平定信・井伊直弼・島津久基など）。古典とは注釈で読むもの、学ぶものであった。注釈は、前の注釈を祖述し、新たに自己の考えを加えていくものであった（五山僧の抄物も同じ）。よって、最後は諸説集成となり、そのいいとこ取りが北村季吟（一六二四～一七〇五）『湖月抄』となる。最後の古典は注釈と同時に普及した『徒然草』になるか。

また、戦乱によつて古典・和歌は衰退するどころか、復活・繁栄する。1、

ポスト承久の乱↓古典的公共圏の成立と三つの勅撰集（千載集、新古今集も戦乱の狭間）2，南北朝動乱↓武家執奏（北朝の権威を支える勅撰集）と古典学（義詮に進上された『河海抄』、義持と耕雲など）3，応仁の乱↓勅撰集中絶するも、後土御門天皇提唱の古典書写運動（近衛政家、平家物語書写）、ビジネスとしての実隆の書写活動、古今伝授のはじまり、連歌師の古典講義、経済活動、地方文化の隆盛、4，関ヶ原合戦前後↓幽斎・通勝・紹巴の書写活動、家康による古典書籍蒐集（駿河譲り本）、5，近世初期↓古活字本・版本等による古典籍出版、地下歌壇の形成（上野洋三『元禄和歌史の基礎構築』、二〇〇三年）

おわりに―ポスト古典的公共圏における古典研究のありよう―

一、明治九（一八七六）年、高橋勘藏の日記（鈴木俊幸『近世読者とその行方』（二〇一七年）。「私は、「賤業」従事のため暇な日とて無く、学問に心を寄せつつも果たせなかつたが、二十八歳の秋になって、ようやく発起して『大学』『中庸』『論語』をあらあら見た。しかし、心惹かれたが『孟子』読書は果たせないままであった。その『孟子』を修めようと夜学を励み勤め、その記録をここに綴った。」↓『經典余師』の普及

二、E・R・クルツイウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』（一九七一年、原著一九四八年）。「ヨーロッパ文学の近代化された研究なくしては、ヨーロッパの伝統を守り育てることはできない」

三、武井和人「古注釈と読解の可能性・続貂」（『中世古典学の書誌的研究』、一九九九年）の警告。「筆者は、繰り返し繰り返し古注釈書の意義を主張せねばならぬ、とも決意した。なんとすれば、（中略）、日本文学研究者の中にも依然として隠然と存在するかにほの見える古注釈書への蔑視と、またそれとは全く逆に、一部の研究者において見られ始めつつある（誤解を恐れずにいへば）楽天的なかひかぶりに、やはりもの申したいと思ふからである。またさらに、古注釈書を己が立論に奉仕させんとばかりにふるまふ旧態依然たるつまみぐひの愚挙暴挙に対して、その非を明確に見える形で剔抉し駁したい、と思ふからでもある。」

小結

モノの発見は、物理的な発見に過ぎず、ハイデガーが批判した「静」としての〈本質〉に過ぎない。我々は、そこから、生成する「動」としての〈存在〉の発見をしなくてはならない。但し、古典の享受を通して、自己の安易な発見的読解ではなく、歴史的読解を通して過去⇨伝統を享受し、同時に、過去⇨伝統と現在⇨私も納得しつつ共に相対化していく内的発見を目指す。そこに非神学としての人文学の意義もあるのではないか。

基調報告②

古典の翻案の可能性——実践者の立場から

川村学園女子大学 千野裕子

I. 実践履歴

劇団貴社の記者は汽車で帰社 (<https://kishax4.amebaownd.com/>)

・二〇〇五年、学習院大学文学部日本語日本文学科の同年入学生有志によつて旗揚げされた劇団。二〇二二年現在、劇団員一八名中一二名が日本文学関係の学科出身者。旗揚げから現在に至るまですべての公演の脚本を発表者が担当している。

【資料1】上演作品

- 二〇〇五年十一月芥川龍之介『偷盜』(於学習院大学構内)
- 二〇〇六年十一月谷崎潤一郎『細雪』(於同左)
- 二〇〇七年十一月太宰治『斜陽』(於同左)
- 二〇〇八年十一月『源氏物語 3幕』(於同左)
- 二〇〇九年 二月『源氏物語 4幕』(於同左)
- 二〇一〇年 一月『かすがの〜伊勢物語』二条后章段より〜
(於イーストステージいけぶくろ)
- 二〇一〇年十一月『在明の別』(於同左)
- 二〇一一年 六月『曾我物語』(於同左)
- 二〇一二年 一月『伊勢物語』連鎖公演 (於同左)
『かすがの〜一条后章段より〜』『ゆめかうつつか〜一条后章段より〜』
- 二〇一二年十一月『義経記』(於同左)
- 二〇一三年 六月『花にあらず〜松浦宮物語』より〜 (於同左)
- 二〇一四年 二月『陸奥話記』(於同左)
- 二〇一四年 十月『聖の帝—古事記・日本書紀より』(於同左)

二〇一五年 七月『宇治十帖の話がしたい!』

(於 Performing Gallery & Cafe 絵空箱)

二〇一五年十一月『源氏物語 三幕』(於築地本願寺ブディストホール)

二〇一六年七月『さらぬわかれ〜伊勢物語』以前〜 (於高田馬場ラビネスト)

二〇一七年 一月『雨月物語の話がしたい!』(於新宿眼科画廊)

二〇一七年 七月『後三年記』(於せんがわ劇場)

二〇一八年 五月『夜の寝覚』(於同左)

二〇一八年十一月『南総里見八犬伝の話が(ちょっとだけ)したい!』

(於 Performing Gallery & Cafe 絵空箱)

二〇一九年 七月『保元物語』(於せんがわ劇場)

二〇二〇年 一月『南総里見八犬伝の話が(もうちょっと)したい!』

(於 Performing Gallery & Cafe 絵空箱)

二〇二〇年 六月『朗読劇 聖の帝—古事記・日本書紀より』(於新宿眼科画廊)

二〇二〇年十二月『花にあらず〜松浦宮物語』より〜

(於南大塚ホール)

二〇二二年 九月(予定)『続・雨月物語の話がしたい!』

↓題材としては『古事記』『日本書紀』『伊勢物語』『源氏物語』『夜の寝覚』『松浦宮物語』『陸奥話記』『後三年記』『保元物語』『曾我物語』『義経記』『雨月物語』『南総里見八犬伝』を扱ってきた。

↓演目選定に影響するもの例

- ・ 内的動機
- ・ 劇化しやすさ (時間・空間・登場人物の人数など)
- ・ 予算
- ・ 劇場設備
- ・ 題材の知名度
- ・ 前後の公演とのバランス

II. 翻案上の試み

1. 様々な観客

- ① 題材を知っている観客（「通じている受容者」）
- ② 題材を知らない観客（「通じていない受容者」）
- ③ その中間層

【事例1】『さらぬわかれ』『伊勢物語』、以前』（二〇一六）

業平

そういう思いを、私はうまく詠むことができません。思いはあつても、どうも言葉が足りないみたいで。でも、あなたは、見事にそれを詠みあげる……あなたの歌はまるで、美しい人が、永久に治らぬ病を抱えているような……。

【事例2】『保元物語』（二〇一九）

後白河

世の乱れは天狗の仕業か、それとも政の悪しきゆえか……。兄上、これではどちらがこの世を乱したのか分かりませぬな。……ああ、そうだ。鎌倉の頼朝が、我をこう罵ったのです。日本

第一の大天狗、と。

2. 二種類の公演形態

① 本公演

・タイトルをそのまま使用

一部分のみ扱う場合や、元テキストの距離が大きくなるものは、副題で「(作品名)より」と入れる

・いわゆる〈時代劇調〉の台詞まわし（度合いは題材による）

・衣装・小道具等はその時代に合わせたものを用いる

・詳細な作品解説を載せたパンフレットを無料配布

↓・〈古典らしさ〉を優先した翻案

・作品外部の情報を盛り込むことが難しい

《いくつかの工夫》

・系図・地図等をホリゾン幕に映像で投影

・登場人物に語らせる形で外部情報を説明する

【事例3】『花にあらず』『松浦宮物語』より』（二〇一三初演）

男 「貞観三年四月十八日。染殿の院の西の対で書き終える」

女 あの、お名前は？

男 私のですか？ 遠慮しますよ。こんなもの、私が書いたのだと

女 知られたくない。

男 では、代わりに何か和歌でも。

女 嫌だと言ってるでしょう。

男 (不満げな表情)

女 ……「花か、花に非ず。霧か、霧に非ず」(後略)

↓登場人物の設定により偽跋をいかす

【事例4】『夜の寝覚』（二〇一八）

中の君 せめて来世だけでも幸せになりたいけれど、それもどうにもな

天女 らないでしょうね。

中の君 この世をあきらめて生きるのか。

天女 それが運命ならば。

中の君 分かった……ならば、もはやそなたに用はない。

天女 え？

中の君 そなたの物語とは、ここでお別れだ。

天女 何を言っているの……？

中の君 この先は要らぬな。あの捨てた八年間と同じだ。

中の君 この先も捨てるというの？ でも、そうしたら、私……。

天女 何を申しおる？ 捨てるのは我だ。もうそなたの物語を見届ける気などなくなった。そなたがどうなるうが知るものか。

中の君 あなたは、どこに行くの……？

天女 それもそなたとは関わりのないことであろう。だが、そうだな

……そなたの物語をやり直しにでも行くか。

↓欠巻・改作の存在を劇中で暗示する
情報は伝わるが、元テキストとの距離が発生する

②Another Works 公演 (二〇一五年)

- ・『(作品名)の話がしたい!』という形のタイトル
- ・現代的にくだいた台詞まわし
- ・衣装に洋服を使用、小道具等も現代風にアレンジ
- ・フラットな劇空間を使用
- ・冒頭場面で作品解説を行う(そのためパンフレット配布はない)
- ↓・わかりやすさ、観やすさを優先した翻案
- ・劇団員(≡現代人)が演じているという形を見せることで、劇中の作品解説や注釈が可能になる。

【事例5】『南総里見八犬伝の話が(ちょっとだけ)したい!』(二〇一八)

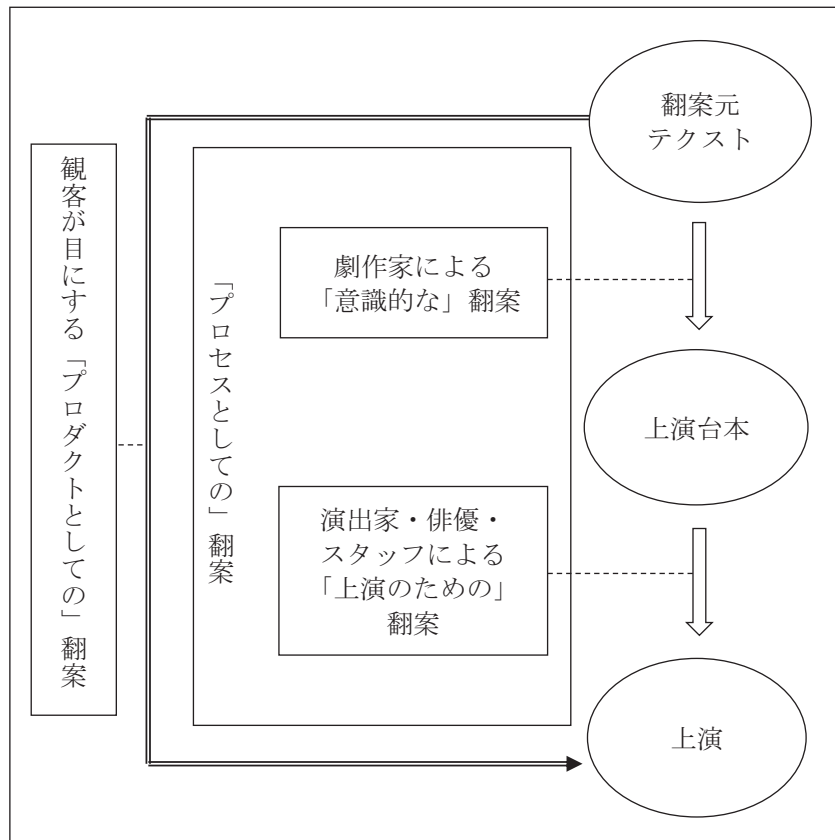
語り ふたりは武蔵の大塚に向かった。あ、さつきから大塚大塚つて言ってるけど、これ、山手線で池袋の隣の、あの大塚のことで

す。けれど、故郷へ着いたら……。

Ⅲ 翻案者と受容者

1. 様々な翻案者

- ・演出、俳優、照明、音響、衣装、舞台、小道具等々の翻案者たち
- ・記録(写真、映像など)も含めれば上演後も翻案行為は続く



・現代劇では使われないような効果音を初めて探し使いました。殺陣の効果音はたくさんあるのでより良いものを選ぶのがむずかしく、水音、炎の燃える音など、自然音を印象的に使う場面があったので、そのシーンに合う音選びは苦勞しました。

②参加することによって、古典文学作品への考え方や印象などが変わったことがあれば、具体的に教えてください。

・古典文学への抵抗感が格段に薄まりました。人間が描かれているという点で現在の物語と違いがないことを実感できました。その上、過去から現在まで残っているだけに、非常に面白い話が多いということも感じます。また、自身で脚本を書く際に枕草子を題材にしましたが、それも古典文学への心理的なハードルが下がったことが一因だと思います。

・元々古典文学専攻（古典作品が好き）だったので、古典文学作品そのものへのスタンスは特に変わらなかつたが、古典を、単に文学作品として人に勧めるだけでなく（それは往々にして結果に繋がらないので）、演劇という別の表現を糸口にする、という活動自体に、古典文学を広める上で意義があると思つた。し、そのような方法が（パツとは浮かばないが、演劇という形以外にも）色々あるといいなあと、イチ古典好きとして、考えるきっかけになつた。

・全く知らない作品よりも、原作を知ってる伊勢物語の方が印象が大きく変わったように思います。劇作家の解釈が入ることによって、作品が再解釈され、自分にはない読み方を知ることができて面白いです。

・登場人物の目線で作品を考えることを通して、意外に現代にも通じる内容や考え方も含まれていることを発見し、参加以前よりも古典文学を身近に感じるようになった。一方で、現代とは全く異なる価値観が浮き彫りになることもあり、そうした「異文化」に驚くことも楽しみの一つになつた。

2. 受容者に起こり得ること

・翻案元テキストを読んだ（読み返した）ときの影響

・俳優化、インターテキスト的知識の影響

【資料3】活動参加者へのアンケート

お客さんから、「原作を読んでみたい」といったようなことを言われたことがありますか？ ある場合は具体的なエピソードを教えてください。

・南総里見八犬伝など、いわゆる古典なイメージが強くても、中身はドラゴンボールみたいで面白いよ！的な話はした気がします。

・「雨月物語の話がしたい」を観に来てくれた友人から、観劇の帰り道に雨月物語の原作を購入し、読みはじめたと報告を受けた。

・角川ソフィア文庫をすすめた。

【事例6】『夜の寝覚』（二〇一八）

寝覚の上と内大臣（男君）を演じた俳優の主な共演

・対の上と右大将（『在明の別』二〇一〇）

・恬子内親王と在原業平（『伊勢物語 連鎖公演』二〇一三）

・静御前と源義経（『義経記』二〇一三）

・有加（藤原経清の妻）と藤原経清（『陸奥話記』二〇一四）

・中の君と匂宮（『宇治十帖の話がしたい！』二〇一五）

・藤壺と光源氏、紫の上と光源氏（『源氏物語 三幕』二〇一五）

・浜路と大塚信乃（『南総里見八犬伝の話が（ちよつとだけ）したい！』二〇一八）

【主な参考文献】リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』（片渕悦久・鴨川啓信・武田雅史訳 晃洋書房 二〇二二）／岩田和男・武田美保子・武田悠一編『アダプテーションとは何か―文学／映画批評の理論と実践』（世織書房 二〇一七）／中村三春『原作』の記号学―日本文芸の映画の次元（七月社 二〇一八）／今野喜和人編『翻訳』アダプテーションの倫理―ジャンルとメディアを越えて（春風社 二〇一九）

シンボジウム「リベラル・アーツとしての古典研究の可能性」

これからの日本古典籍研究のビジョンをめぐる

早稲田大学 河野貴美子

一、はじめに——学際、国際、通史

▽ハルオ・シラネ・兼築信行・田渕句美子・陣野英則編『世界へひらく和歌——

—言語・共同体・ジエンダー——』勉誠出版、2012

*「序言（ハルオ・シラネ）」本書に収められた論考は、比較論的でグローバルな視点と国内的な視点の双方から和歌を考察することを明確な目的として書かれたものである。また、日本と海外の読者双方に読んでもらえるよう、私たちは本書をバイリンガル版として制作した。本書は必ずや日本文学研究の国際化への重要な一歩となるであろう。」

▽吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『シリーズ 古代史をひらく』全6冊、吉川弘文館、2019～2021

*「刊行にあたって」（吉村武彦・吉川真司・川尻秋生）「全編をつうじて、従来の「古代史」の枠内に閉じこめるのでなく、そのテーマが日本史全体のなかでどういう意味を持つのか、つねに意識するように心がけました。「学際」「国際」「通史」という三方向の視点を併せ持つことで、これまでにない古代史のシリーズを創り上げ、未来に向けて「古代史をひらく」ことをめざします。」

▽『東アジア文化講座』全4巻（染谷智幸編）第1巻 はじめに交流ありき 東アジアの文学と異文化交流』金文京編第2巻 漢字を使った文化はどう広がったのか 東アジアの漢字漢文文化圏』小峯和明編第3巻 東アジアに共有される文学世界 東アジアの文学圏』ハルオ・シラネ編第4巻 東アジアの自然観 東アジアの環境と風俗』文学通信、2021

*「総序 東アジアの文化と文学」（小峯和明）「近代に始まる日本文学研究は、歴史学の「国史」と並ぶ「国文学」として、日本文化のよりどころたるべく、その意義が究明されてきた。……必然的に日本だけの内部に収束する内向きの指向性が強いことは、西洋をモデルにした、日本にしか通用しない古代・中世・近世・近代といった文学史や文化史の時代区分に端的にうかがえる。あるいは、和漢比較研究に代表されるように、中国古典

との比較から日本文学の特徴を引き出す、一方通行的な受容論の路線が主導的であることからも明白だ。……ここでの東アジアとは、中国、朝鮮半島、日本、琉球、ベトナムなど、漢字漢文の共有圏にあつた十九世紀以前の前近代が主対象になる。……東アジアの「漢字漢文文化圏」から日本文化総体を問い直し、それを日本的なるものに回帰させるのではなく、世界にいかにも拓いていくかを追究していきたい。……文学研究はもとより人文学全体の危機感が高まっている。……打開策の鍵を握るのは……「国際と学際」しかなく、その内実をいかに拡充していくかが課題となつていく。」

二、「日本」文「学史」の試み

Wiebke DENECKE 教授 (MIT) との共同プロジェクト

▽河野貴美子・Wiebke DENECKE 編『アジア遊学 162 日本における「文」と「ブンガク」』勉誠出版、2013

*「序言」（河野貴美子・Wiebke DENECKE）「東アジアに特有の意義をもって形成、継承されてきた伝統的な「文」の概念……「文」の意義と歴史をみるならば、「文」の概念への問題意識なくしては、日本、そして東アジアの文化の本質に迫ることは不可能なのではないか。近代以降隠蔽されてしまった「文」の概念の文化的意味と意義を再び発掘し、そのうえで、二十一世紀の現代に続く「文」の意味と意義を捉え直してみたい。」

▽『日本「文」学史』A New History of Japanese "Literature" 全三冊、勉誠出版、2015～2019

第一冊『文』の環境——「文学」以前』（河野貴美子・Wiebke DENECKE・新川登亀男・陣野英則編）

*「文学」以前、すなわち前近代における日本の「文」がいかなる環境のもとで、いかなる世界を形成していたかを、とくに「和漢／漢和」という点に重心を置いて描き出す。冒頭に日本および中国の「文」の概

念に関する総論を置き、問題意識の所在を示す。

第二冊『文と人びと——継承と断絶』(河野貴美子・Wiebke DENECKE・

新川登亀男・陣野英則・谷口眞子・宗像和重編)

*「文」と人びととの関わりを歴史的にながめ、日本「文」学史を貫くもの(「継承」とともに、従来の歴史区分とは異なる角度から変化や転換(「断絶」)を照らし出す。第一部「文の発信者：文の人、文と人」、第二部「社会における文の機能と文人の働き」、第三部「文の受信者：文を受けとめつなぐ人」、第四部「文の人と媒体：文を伝えるメディア」。

第三冊『「文」から「文学」へ——東アジアの文学を見直す』(河野貴

美子・Wiebke DENECKE・新川登亀男・陣野英則編)

*西洋の概念や学問と出会い、「近代化」に向かった日本の「文」から「文学」への移行を、東アジア全体の問題として位置付け、現在に至る「文学」の意味を改めて問う。第一部【近代化】社会の変化と「文」の変革」、第二部【近代化】東アジアの「文」から「文学」への道」、第三部【現代の「文学」】文学の現在と人「文」の将来」。主題別に目次を構成し、それぞれの章やコラムにおいて、日本・中国・韓国の立場や視点からの発言を並列。

参考：

・Wiebke DENECKE・河野貴美子『日本「文」学史』A New History of Japanese "Literature" の試み—全三冊刊行に向けて『リポート笠間』61「特集 理想の『日本文学史』」、2016.11

・魏樸和(Wiebke DENECKE)・河野貴美子(孫世偉訳)『日本「文」学史 A New History of Japanese Literature』与「域外漢学」、『熱風学術(網刊)』7、上海大学中国当代文化研究中心、2017.12

・Wiebke DENECKE・河野貴美子「『日本文学史』の今後—100年—」『日本「文」学史』から見通す「荒木浩編」『古典の未来学——Projecting Classicism』文学通信、2020

三、新たな「対話」の可能性

1 21世紀の人文知とは——世界の古典学から考える(2019.6.23)

*日本、東アジア、インド、ペルシア、ヨーロッパ。世界の各地域の古典学の立場から21世紀の人文知を考え、討論するワークショップ。

発表者：Wiebke DENECKE、河野貴美子、荒木浩、河野至恩、小倉智史、庄子大亮、沈慶昊、Sunil SHARMA、竹村信治、渡邊顕彦。

コメンテーター：山本登朗、ワトソン・マイケル。

パネル1：古典学の現状と未来

パネル2：世界の古典学の比較研究の可能性

パネル3：現代における古典・古典学の役割

2 IMPAGINATION:

Forms, Media and Circulation of Writing and Publication

International Conference in Comparative History of Philology

(台湾 中央研究院歴史語言研究所、2017.3.20-23)

*ギリシア、ヘブライ、ネーデルラント、南アジア、中国、チベット、朝鮮、日本における“page”の概念をめぐる比較文献学。発表者：Theodor Dunkelgrün, Shenyu Lin, Anthony Grafton, Tyler Williams, Ren-Yuan Li, Bruce Rusk, Loreta E. Kim, Key-Sook Choe, Glenn Most, Michael Puett, Christoph König, Goran Proot, Kevin Chang, Kimiko Kono.

→ Kimiko Kono, Translation: Jeffrey Knott, "Chapter 12. Japanophone Glosses (kumten) in Printed and Digitized Manuscripts" In *Impagination – Layout and Materiality of Writing and Publication*, ed. Ku-n'ing (Kevin) Chang, Anthony Grafton and Glenn W. Most, De Gruyter, 2021.

3 中日古典学ワークショップ(2018, 2019)

*北京大学人文学部、同中国語言文学系、早稲田大学総合研究機構日本古籍研究所による共催ワークショップ。中国の中国古典研究者と日本の日本古典研究者とがそれぞれ研究対象とする資料や研究方法について紹介、問題提起、対話を行う。第二回は青年論壇も開催。

◆第一回中日古典学ワークショップ「中日古典学の交流と融合」(2018.11.10)

・笹原宏之「六朝・隋・唐で造られて日本に使用の痕跡が残った『佚存文字』」

・孫玉文「蝦蟇」と「蛤蟆」

・胡敬瑞「財用錢三十二用來買什麼?」

・高松寿夫「8世紀日本で読まれた漢籍——『懷風藻』注釈作業をとおしてうかがえること」

・邵永海「日本学者関於『韓非子』一書の研究——以太田方『韓非子翼註』為例」

・新川登亀男『日本書紀』の読み方「天子」をめぐること」

・程蘇東「日伝本『五行大義』所見古本『春秋繁露・治順五行篇』輯註」

・吉原浩人「心性罪福因縁集」の院政期写本と元禄版本の本文の差異」

・傳剛『春秋経伝集解』興国軍学本及其在日本的刊刻」

・劉玉才「天野山金剛寺永仁写本」全経大意「誦論」

・顧永新「北宋国子監校刊『五經正義』次序析疑——以『上五經正義表』校勘为中心」

・田中史生「『白氏文集』惠萼書写本の伝来」

・陣野英則『源氏物語』若菜下「卷の中国故事——不穩を示唆する方法——」

・河野貴美子「清原宣賢の抄物を通してみる漢籍の利用」

・杜曉勤「日本古典籍所存漢詩声病格律資料的詩学史価値」

4 「座談会」「古典のあり方をめぐって」「國學院雜誌」119-2、2018.2

*日本、中国、西洋の古典の研究者が「古典のあり方」を語った座談会。

二種類の古典（「本来の古典」と「近代の（発見した古典）」、古典の現代語訳や翻訳をめぐる議論など。上野誠、川合康三、沓掛良彦、ワトソン・マイケル、(司会)河野貴美子。

◆【川合】……我々は少数派なのではないかということです。私たちが共有している考え方に共感する人たちをもっと増やしてゆきたい。」

四、リベラル・アーツとしての日本古典研究の可能性

1 早稲田大学文学部「日本語日本文学研究2(中古文文学)」(副題「空海の文学」)

① 中古文文学における「文」、『三教指帰』の文体(散文、頌、賦、詩)

② 空海の「文」への思考、「文」の機能

③ 科目「古典」の可能性(文学、語学、史学、哲学、宗教、芸術、法律、建築…)

〈A〉『三教指帰』序

文之起、必有由。天朗則垂象。人感則含筆。是故、鱗卦・聃篇、周詩・楚賦、動乎中、書乎紙。雖云凡聖殊貫、古今異時、人之写憤、何不言志。

〈B〉『文鏡秘府論』天卷・総序

夫大仙利物、名教為基、君子濟時、文章是本也。

〈C〉『三教指帰』卷下・仮名乞兒論

遂乃砥智恵刀、涌弁才泉、被忍辱介、駕慈悲驥、非疾非徐入龜毛之陣、不驚不憚对隠士之旅。…因茲、先以孔璋檄、示以魯陽書。將帥悚懼、軍士失氣。面縛降服、无勞血刃。

*孔璋：陳琳(？～217)。「為袁紹檄豫州」檄吳將校部曲文(『文選』)。

魯陽：魯仲連と鄒陽。『史記』魯仲連鄒陽列伝

〈D〉『三教指帰』卷上・龜毛先生論

筆謝除痾、詞非殺將。

〈E〉『三教指帰』卷下・仮名乞兒論「写懷頌」

彼孔縱聖 栖遑不黙 此余太頑 當從何則

欲進无才 將退有逼 進退兩間 何夥歎息

参考：河野貴美子「危機下の「文」の機能とその力——空海の場合(久保朝孝編『危機下の中古文文学2020』武蔵野書院、2021)

2 書誌学、文献学の協働

▽根本彰「アーカイブの思想 言葉を知に変える仕組み」第6講「知の公共性と協同性」教養とは何か、みず書房、2021

人文主義的な伝統のなかで、書誌学や文献学が重要な位置を占めたことについて述べました。…とくに注目しておきたいのは、文献学(philology、ドイツ語 Philologie)を書誌学(bibliography)と区別して西洋思想史の流れの上に意識的に位置づける考え方です。…彼ら(フリードリヒ・ヴォルフ、アウグスト・ベーク、フリードリヒ・ニーチェ)発表者補)の文献学は、古代ギリシア、ローマから中世を経て近代に至るまでに蓄積されている文献を通じて、先人の世界の見方、世界の認識の仕方を広く研究しようというもので、今で言う哲学、文学、宗教、美術、歴史、科学などを広く対象にして総合化する見方です。ドイツ思想史の安酸敏眞はベークの見方を紹介して、「人間精神から産出されたもの、すなわち、認識されたものの認識」ととらえていて、ここから、学問の歴史や歴史認識についての学問というような領域を文献学と呼んでいると述べています。これが、中世以来の人文主義の伝統をしっかりと踏まえていることは明らかです。

参考：安酸敏眞『人文学概論』12 文献学と解釈学、知泉書館、2014

(1) 書誌学

▽佐々木孝浩『日本古典書誌学論』はじめに、笠間書院、2016

日本書誌学会は戦前から存在していたのであるから、書誌学的な研究も古色蒼然たるものである印象があるかもしれないが、基礎的な研究は常に古くて新しいものであるはずである。書誌学の古典文学研究における有効性、あるいは活用の余地はまだまだ潤沢に存しているにちがいないのである。

▽書誌学の歩み

『書誌学』1933～1942、復刊1965～1985

・長澤規矩也『図書学辞典』三省堂、1979

- ・川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』雄松堂出版、1982
- ・藤井隆『日本古典書誌学総説』和泉書院、1991
- ・井上宗雄他編『日本古典書誌学辞典』岩波書店、1999
- ・堀川貴司『書誌学入門―古典籍を見る・知る・読む』勉誠出版、2010
- ・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『図説 書誌学 古典籍を学ぶ』勉誠出版、2010
- ・国文学研究資料館「日本古典籍講習会」(2021年度第16回)、「若手研究者を対象とした日本古典籍講習会」(2021年度第4回)。
- 「アーカイブズ・カレッジ(史料管理理学研修会)」14の大学院で単位認定。

②中国古文献学

▽全国高等院校古籍整理研究工作委员会(古委会)

- 一九八三年設立。教育部直屬機関。拠点は北京大学中国古文献研究中心。21の大学研究機関及び5教育機関と直接連携。重点項目成果として北京大学古文献研究所主編『全宋詩』七十二冊(北京大学出版社、1991、98)、嚴紹璁編著『日藏漢籍善本書録』全三冊(中華書局、2007)等がある。

▽専門学術雑誌

- ・『文学遺産』中国社会科学院文学研究所、1954創刊、隔月刊、692期まで既刊。
- ・『文史』中華書局、1962創刊、季刊、133輯まで既刊。
- ・『文献』国家図書館、1979創刊、隔月刊、182期まで既刊。
- ・『中国典籍与文化』主管：中華人民共和国教育部、主編：全国高等院校古籍整理研究工作委员会、1992創刊、季刊、118期まで既刊。
- ・『域外漢籍研究集刊』張伯偉編、中華書局、2005創刊、第21輯まで既刊。
- ・『國際漢学研究通訊』北京大学國際漢學家研修基地編、中華書局、2010創刊、第20期まで既刊。

▽北京大学中文系古典文献学專業

- 國務院科学規劃委員会が開いた古籍整理出版規劃小組成立及規劃制定會議において提案、中華書局との連携のもと一九五九年開設。学部生は古代漢語、中国古代文学史、古代典籍概要、史学概論、哲学導論が必修。選択必修科目には学年論文、現代漢語、中国古代文学史、中国古代文化、文字学、漢語音韻学、訓詁学、版本学、目錄学、校勘学、古文献学史、敦煌文献概要、中文工具書がある(38単位中30単位要履修)。修士の必修科目は專書選読、古文献学前泊問題講座、古典文献学

討論班、小学經典導読、古典文献学研究、「三目」(『漢書』芸文志)・『隋書』經籍志・『四庫全書總目』研究、古籍整理の理論与实践、中国経学史研究。博士は古文献学研究、古代典籍与古代文化・学術研究、出土文献与古文字研究、海外漢籍与海外漢学研究的四領域。

参考：『北京大学中文系古典文献学專業教學計畫』、北京大学碩士研究生培養方案(2014修訂版)、「北京大学博士研究生培養方案」(2014修訂版)。温儒敏主編『北京大学中文系百年図史：1910-2010』北京大学出版社、2010

▽孫欽善『中国古文献学』

普通高等教育“十五”国家級規劃教材、北京大学出版社、2006年、全423頁

目次：緒論／目錄／版本／校勘／弁偽／輯佚／古文献的語文解読(総説・文字・音韻・訓詁)／古文献的内容考実／古文献的義理弁析

*第一章第二節・一 什麼是古文献学(古文献学とは何か)「古文献学は關於古文献閱讀・整理・研究和利用的學問。：古文献就形式而言、包括語言文字和文本形態、涉及中国古代語言文字学和古籍版本・目錄・校勘・輯佚・弁偽・編纂学等(其中目錄・輯佚・弁偽学又与内容有関。就内容而言、分具体和抽象兩個方面、具体方面包括人物・史事・年代・名物・典制・天文・地理・曆算・樂律等、涉及自然和社会・時間和空間諸多方面的实在内容；抽象方面主要指思想内容、需要緊密結合語言文字和具体内容由淺入深地剖析探求。」

参考：田島公「天皇家・公家文庫取藏史料の高度利用化と日本目錄学の進展―知の体系の構造伝来の解明」基盤研究(S)研究課題番号：17H06117、2017
 2022年度。研究の背景・目的「(3)家」との文庫史・蔵書目錄・研究論文等の体系化とその総体の提示を行い、國際発信する」と

五、まとめにかえて

▽日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分科会提言「21世紀の教養と教養教育」(2010)2現代社会の諸問題と教養および教養教育の課題、

(3)知の地殻変動と「知」の再編・再構築

自己中心・自国中心・強者中心の生き方・考え方や社会の在り方ではなく、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を拡げていくことのできる生き方・考え方や社会の再構築が求められている。その再構築を担い志向する倫理の再構築と、そのような倫理に裏打ちされた教養の形成、知性・智恵・実践的能力の形成が求められている。

◆「中古文学研究」の可能性をひらく(深化+比較、対話、共感)

中古文学会二〇二一年度春季大会
研究発表・大会企画シンポジウム資料集

発行日 二〇二一年五月二三日

発行 中古文学会

事務局・愛知淑徳大学文学部久保朝孝研究室内
〒四八〇―一一九七

愛知県長久手市片平二丁目九

電話 〇五六―一六二―四二―一（代表）

制作 株式会社 新典社

〒一〇一―〇〇五一

東京都千代田区神田神保町一―四四―一一

電話 〇三―三三三三―八〇五一